

花山天皇 紙屋川上陵鳥居改築工事に伴う立会調査

花山天皇紙屋川上陵は、京福電気鉄道（嵐電）北野線北野白梅町駅から北北東へおよそ1 km、京都府京都市北区衣笠高橋町に所在している。その立地は、京都盆地の北西を画する船山、釈迦谷山、（左）大文字山、衣笠山の麓から南東方向へと広がる段丘上にあたっており、当陵の東側には、南流する天神川（紙屋川）の浸食によって深い谷が形成されている。

当陵の敷地は「周知の埋蔵文化財包蔵地」、すなわち「遺跡」の範囲に含まれてはいない。周辺を見ると、西南西へおよそ300 mの敷地神社（わら天神）境内に衣笠天神森古墳が、東へおよそ150 mの紙屋川東岸には豊臣秀吉が築いた「御土居跡」があり、南南東へおよそ520 mのところには平安京への遷都時から鎮座していると伝わる平野神社がある。平野神社の南方の北野白梅町交差点一帯には、飛鳥時代に創建されたと考えられている「北野廃寺跡」があり、それを取り巻くように弥生時代から室町時代までの複合集落遺跡である「北野遺跡」が広がっている⁽¹⁾。

第65代花山天皇の在位期間はわずかに2年に満たないが、その名は、藤原兼家・道兼父子の陰謀による突然の退位・出家事件や退位後の藤原伊周・隆家兄弟による襲撃事件、熊野権現の靈験によって西国三十三所巡礼を復興したとの伝説などで広く知られている。天皇は、寛和2年（985）の退位から23年後の寛弘5年（1008）に崩御し、「紙屋川上、法音寺北」⁽²⁾、「大和寺東辺」⁽³⁾に葬られた。後世、その陵所は失われたが、「幕末の修陵」に際して、法音寺の旧跡と目される字「法音寺屋敷」と「紙屋川」の存在、推定される法音寺と大和寺の位置関係により、現在地に所在した「菩提塚」と呼ばれる小塚を治定するに至った⁽⁴⁾。

墳塋は、小土堤と空濠に囲まれた方丘である。方丘の一辺は約16 m、濠底からの高さは約2.8 m、一般拝所の中央付近と墳頂部との高低差を測ると、約2.2 mとなる。いわゆる「文久山陵図」の成功図では、墳塋の本体である塚の周囲に犬走り状の平坦面を控えてから空濠を掘削している状況を読み取ることができるが、現状では犬走り状の平坦面は判然としない。空濠の深さはおよそ1.3～1.4 mで、犬走り状の平坦面を控えてのちに巡る小土堤の高さは、内周側でおよそ0.9～1.0 m、外周側でおよそ1.0～1.2 mである（第6図）。

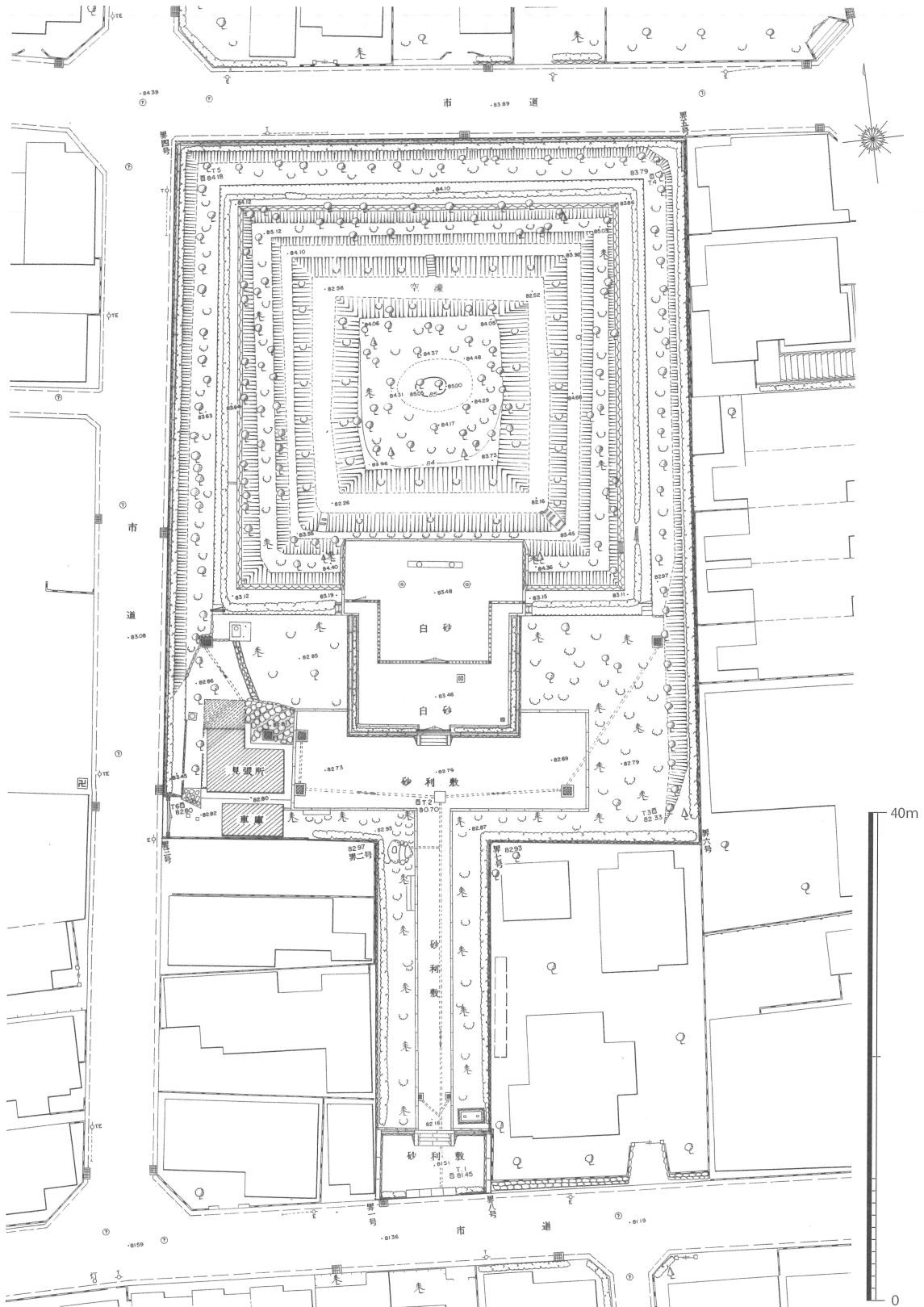
当陵における調査事例としては、昭和56年に実施した南側境界ブロック塀設置工事に伴うもの⁽⁵⁾、昭和59年に実施した排水管改修工事に伴うもの⁽⁶⁾、昭和63年に実施した鳥居改築工事に伴うもの⁽⁷⁾がある。当工事は、昭和63年に建てた木造鳥居が老朽化したことから実施されたものである。

今回の鳥居改築工事は、成務天皇狭城盾列池後陵、二條天皇香隆寺陵と当陵の3陵の鳥居改築を一括で発注したもので、工期は令和元年11月14日～2年3月19日であった。当陵については、陵墓調査室員と現地の監区職員立ち会いの下で12月16日に掘削を開始し、既存基礎の撤去が終わって完掘したのち、20日まで記録化作業を行った。また、令和2年1月6日、21日には新規基礎の設置と周囲の埋め戻しが行われたため、監区職員が立ち会い、排土中に遺物が含まれていないかの確認に努めた⁽⁸⁾。

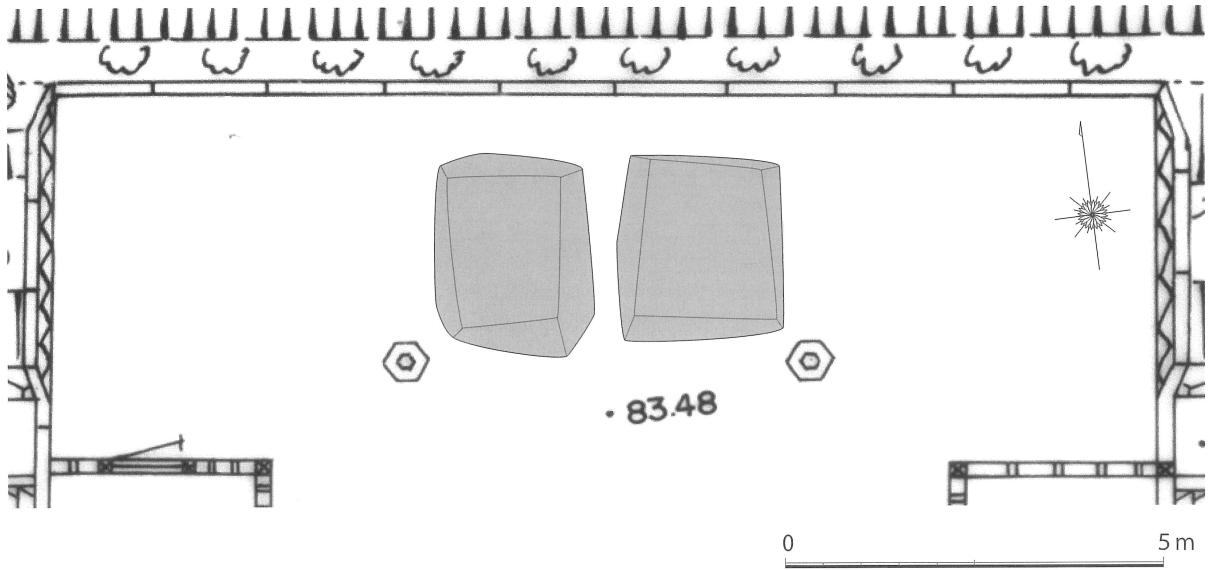
当陵での掘削箇所は、既存基礎の撤去を伴ったことから、既存基礎よりも一回り大きい、長さ・幅ともおよそ2 m、深さおよそ1.5 mのものが2箇所となった（第7図、図版8）。

今回の掘削箇所での土層は、その性格から大きく5層に大別できる（第8図）。Ⅰ層は、拝所内に敷き詰められた白砂の層である。Ⅱ層は、先代以前の鳥居など、拝所造成以降に設置された工作物の設置・撤去に関わるものや、拝所の整地に関わる土層である。Ⅲ層は拝所そのものの造成土。Ⅳ層は拝所造成前に形成されていた土層で、旧表土と、その直下で人為的改変を受けている層に細分でき、遺物を包含する。Ⅴ層は地山層である。

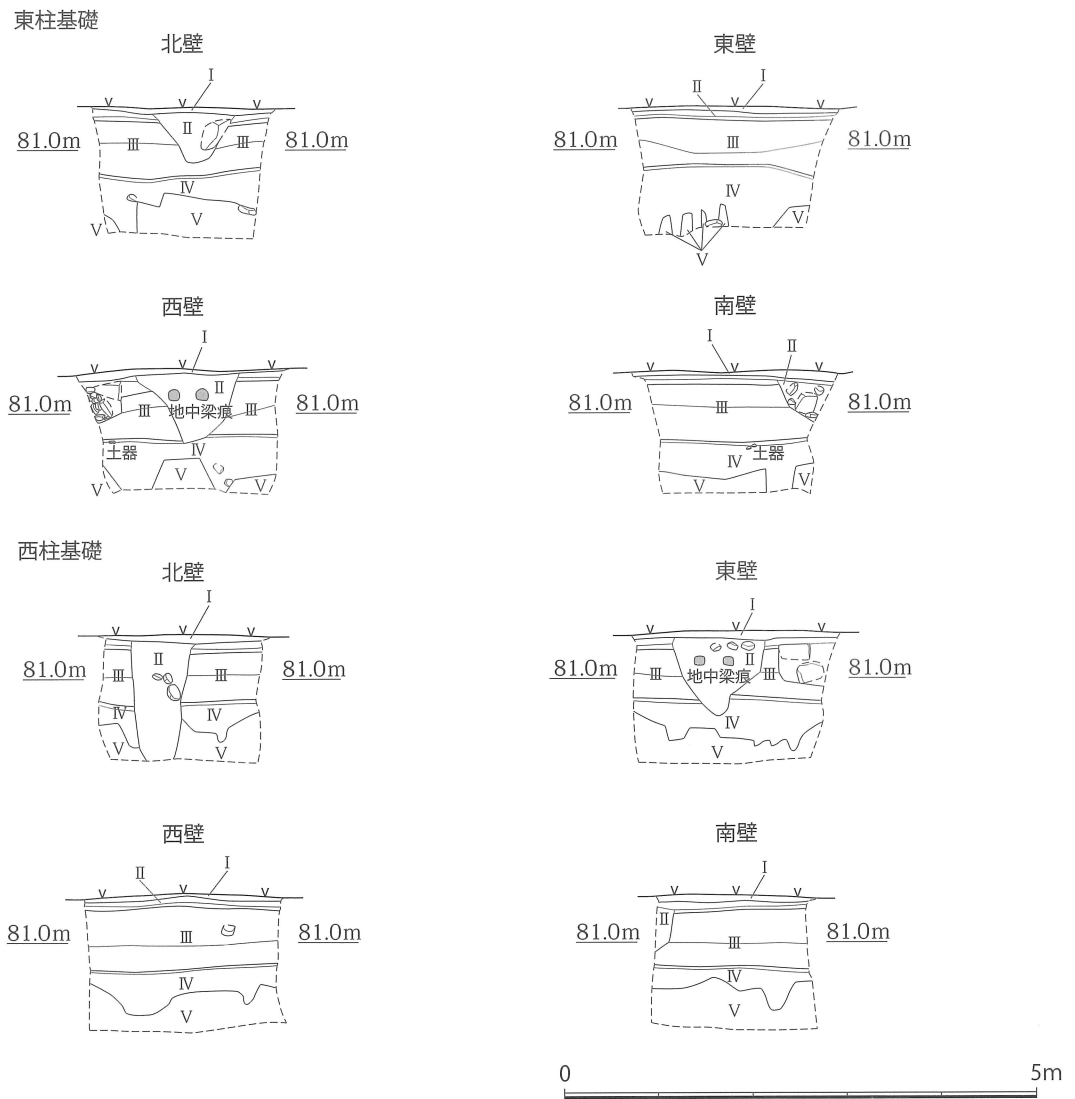
掘削箇所の断面では、Ⅱ層を埋土としてⅢ～Ⅴ層を切る歴代鳥居の掘り方が認められたほか、Ⅳ層を埋土としてⅤ層を切る落ち込みが複数認められた。落ち込みには、幅30 cm程度のものと幅15 cm程度のものの2種があったが、断面観察によるものなので、落ち込みの平面形状や、各落ち込みの平面的な位置関係は不明である。非常に狭い範囲に複数の落ち込みが認められるため、同じような位置で繰り返し掘り込みが行われ



第6図 紙屋川上陵 陵墓地形図 (1/500)



第7図 紙屋川上陵 掘削箇所位置図 (1/100)



第8図 紙屋川上陵 掘削箇所断面図 (1/80)

た結果によるものと思われる。先にも述べたように、当陵は「幕末の修陵」時に治定されており、その際に拝所が造成されているので、IV層の形成や、それを埋土とする掘り込みは、近世末までに行われたものであると判断される。

遺物としては、IV層から出土した土師器片4点があるが、小片のため図化していない。

以上、今回の掘削箇所においては保存すべき遺構は確認されず、工事は予定どおり施工された。

(有馬 伸)

註

- (1) 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課「京都市遺跡地図提供システム」

<http://keikan-gis.city.kyoto.lg.jp/kyotogis/iseki/main>

- (2) 「日本紀略」寛弘5年2月17日条(黒板勝美編『新訂増補国史大系』第11巻 日本紀略 百鍊抄、吉川弘文館、1929年)。

- (3) 「御堂関白記」寛弘5年2月17日条(東京大学史料編纂所・財団法人陽明文庫『大日本古記録御堂関白記』上 自長徳四年 至寛弘五年、岩波書店、1952年)。

- (4) 谷森善臣「山陵考」(外池 昇編『文久山陵図』、新人物往来社、2005年)。

上野竹次郎編『山陵』、名著出版、1989年(原典は、山陵崇敬会、1915年)。

なお、当陵の陵名が「紙屋川上陵」となるまでには複雑な経緯をたどっている。「幕末の修陵」時に考証を担当した谷森善臣は、「山陵考」において「日本紀略」からの引用として「今夜奉葬於紙屋上法音寺北」と記し、陵名を「紙屋上陵」としている。一方、「幕末の修陵」完了後に朝廷と幕府に提出された成果図である、いわゆる「文久山陵図」においては、「紙屋川陵」との表題が付されている。さらに、「幕末の修陵」時に拝所内に建てられたと思われる灯籠には「法音寺北陵」と刻まれていたとの記録があり、明治28年に「紙屋上陵」へと改刻されている。しかし、「日本紀略」の記事は、「今夜奉葬於紙屋川上法音寺北(傍点筆者)」とするものもあることから、昭和10年に設置された臨時陵墓調査委員会において陵名の変更が諮問され、同11年に「紙屋川上陵」と改めるべきとの答申がなされた。この答申は戦争の激化により施行には至らなかったが、当庁では現在、「紙屋川上陵」を使用することとしている。

鶴澤探真「華山帝 紙屋川陵 荒蕪」／「華山帝 紙屋川陵 成功」(外池 昇編『文久山陵図』、前掲書)。

「(明治28年)第二號 花山天皇御陵石標竝石燈籠ニ紙屋上陵ト彫刻方ノ件」諸陵寮出張所『明治19～30年陵墓録』(宮内公文書館所蔵、識別番号:2492)。

「七、諮問第十號紙屋上陵ハ紙屋川上陵ト改メラルベキヤ」諸陵寮『臨時陵墓調査委員会諮問書類』4(宮内公文書館所蔵、識別番号:40359。原題は、『臨時陵墓調査委員会書類及資料』4 自諮問第2号 至諮問第10号)。

- (5) 石田茂輔「昭和五十五年度 陵墓関係調査概要 調査の全容」『書陵部紀要』第33号、宮内庁書陵部、1981年。

- (6) 清水孝平・福尾正彦「紙屋上陵排水管改修工事箇所の調査」『書陵部紀要』第36号、宮内庁書陵部、1984年。

- (7) 飯倉晴武「昭和六十三年度 陵墓関係調査概要」『書陵部紀要』第41号、宮内庁書陵部、1989年。

- (8) 本件調査に関しては、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の馬瀬智光氏、熊谷舞子氏に現地を検分していただき、種々のご教示を賜った。記して感謝の意を表したい。



1 東柱基礎 北壁 (南から)



2 東柱基礎 東壁 (南西から)



3 東柱基礎 南壁 (北から)



4 東柱基礎 西壁 (東から)



5 西柱基礎 北壁 (南から)



6 西柱基礎 東壁 (西から)



7 西柱基礎 南壁 (北から)



8 西柱基礎 西壁 (北東から)